

成人発達理論の再検討—役割移行を前提としない現代成人の語りを通して—（理論編）

No.1 ダニエル・レヴィンソンの発達理論とはなにか

21A26026 武内紫衣奈

【第1章】ダニエル・レヴィンソン（1920～1994）

ダニエル・レヴィンソンは、カリフォルニア大学バークレー校で社会科学を学び、1947年に民族中心主義に関する博士論文を完成した。その後、バークレー校やウェスタン・リザーブ大学で権威主義的人格などの人格研究を行い、1950年からハーバード大学で人格と組織環境の相互作用を研究した。1966年にイエール大学へ移り、研究テーマを成人発達へ転換。40人の中年男性へのライフヒストリー・インタビューをもとに『男の人生の四季』を著し、その後は女性の成人発達研究にも取り組んだ。

【第2章】レヴィンソン研究の目的とサンプリング

【2-1】研究の発端と目的

- 関心の核心:30～50歳の成人期にどのような発達が見られるのか。
 - 特に「40歳前後」が人生の重要な転換点であるという直感的な仮説から始まった。
- 対象:青年期から中年期への移行を捉えるため、最終的に**35～45歳**に焦点を当てた。
 - 当初は35～45歳のみの予定だったが、成人前期（35歳以前）に有用な理論がないことに気づき、成人期入り口から40代後半までを網羅する理論へ拡大。
- 目指した概念:生物学的、心理学的、社会学的な多様な変化を包括できる「発達の概念」を創出すること。

【2-2】サンプル構成（40人の男性）

集中的・多面的な調査を行うため、能力の限界値である40人を選出。

- 男性に絞った理由:40人を男女20人ずつにするにはサンプル数が不十分と判断。
- 世代背景:1923～1934年生まれ。大恐慌、第二次世界大戦、朝鮮戦争を経験した世代。
- 4つの職業グループ（各10名）:仕事は社会生活の基盤（プラグ）であり、社会母体との結びつきを規定するため。
 - 1.労働者:多角展開するA社、急成長のB社から選出。
 - 2.管理職:同上。

- 3. 生物学者：将来有望な研究者。
- 4. 小説家：多様な作風を持つ、2冊以上の出版経験者。

【第3章】調査の実施方法と背景分析

【3-1】徹底した個別面接

- 時間と密度：1人につき合計10～20時間（2～3ヶ月で5～10回）。さらに2年後の追跡面接を実施。同じ面接官が常に担当。
- 記録：すべてレコーダーで録音し、1人あたり平均300ページのテープ起こし原稿を作成。
- 補助ツール：TAT（投影法検査）により、無意識下の体験や興味を補完。

【3-2】多角的なコンテキスト調査

個人の語りだけでなく、「外的な状況」を把握するための調査も並行した。

- 組織分析：勤務先の会社や大学の雇用・昇進政策、歴史を分析。
- 社会状況：文学界の動向や書評の調査。
- 家族の視点：多くのケースで「妻」への面接も1回実施し、夫の全体像を補強した。

【3-3】社会的属性の多様性

有意選択法（条件に合う人を選ぶ手法）により、以下の多様性を確保した。

- 社会階級：貧困層（15%）から富裕層（10%）まで。
- 人種・宗教：黒人5名を含む。プロテスタント、カトリック、ユダヤ教、混合など。
- 教育：大卒28人、高校中退6人（主に労働者）。
- 結婚：全員に結婚経験あり。80%が最初または二度目の結婚で子供を持つ。文

【第4章】伝記的面接法と「生活構造」の発見

【4-1】伝記的面接法（Biographical Interview）

「人には誰でも語るべき身上の話（ストーリー）がある」という信念に基づいた手法。

- 全生涯の網羅：それぞれの生活史をもとにして、それぞれの個人史を作成し、それに基づいて一般論を導き出すことを基本とした。出身家庭、結婚、仕事、政治・宗教観、病気、死、人生の転機。
- 内面と外面の統合：出来事の客観的な事実だけでなく、その人にとっての「内面的な意味付け」を重視。
- 面接態度：面接技術より、親密な関係性づくりが肝心とし、契約の交渉から面接まで複合過程をこなす。

- 個人史を用いた一般論の作成：40人の生活を系統立てて再現する個人史作成と発達理論の作成を同時進行で進めた。二次サンプルとして有名人の伝記からもヒントを得た。

【4-2】理論の広がりと「生活構造」の提唱

- 研究目的の深化：
- 「生活構造」概念の誕生：
 - 定義：ある時期における個人の生活の基本的パターン、あるいは設計。
 - 役割：自我の発達（一面）ではなく、自己と外界の相互関係の全体像を捉えるための単位。

【4-3】発見された秩序

成人の生活は「可変要素」が多いが、一定の期間におけるパターン（安定期）と、その発展（過渡期）が交互に現れる。

- 安定期 = 生活構造を築きその中で生活を向上させていく
- 過渡期 = そのときの生活構造に終止符をうち（自己と外界における）可能性を模索して新しい選択を

この順序はライフサイクルにおいて一定の規則性を持ち、個人の生活に「水面」のような基盤を与えている。

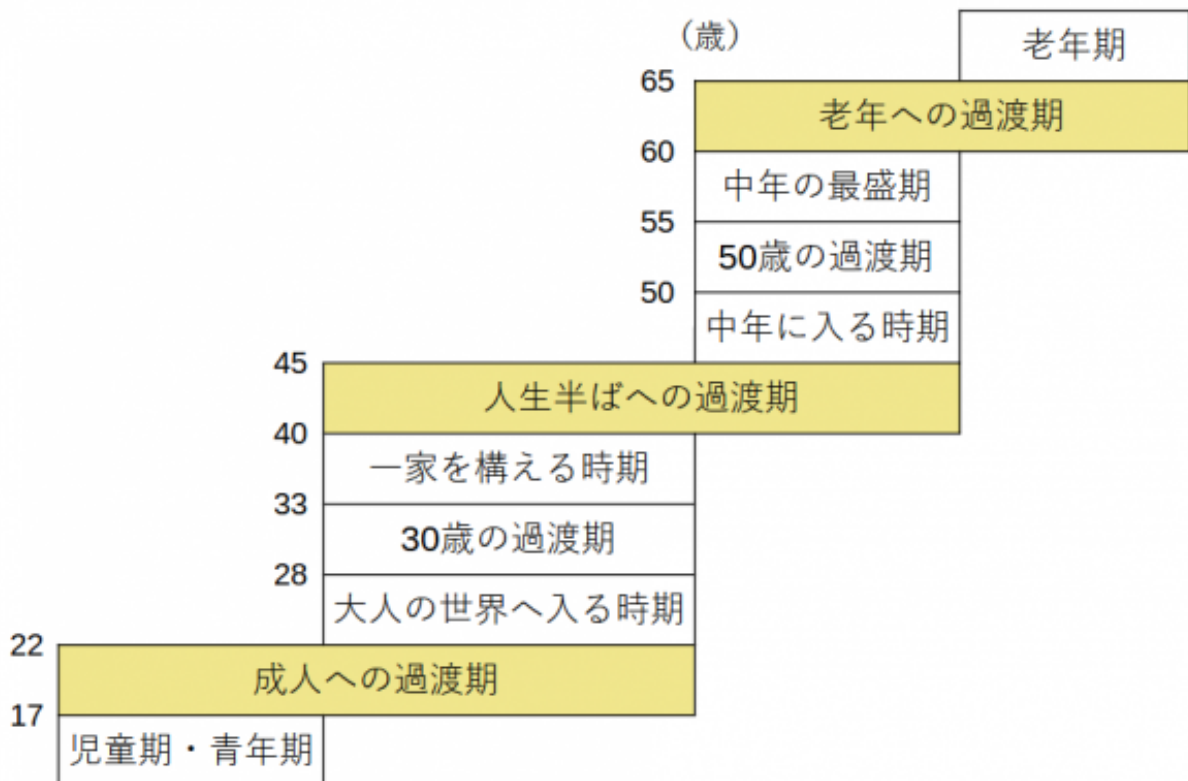


図 1 ダニエル・レビンソンの発達段階説

【4-4】発達のサイクル：安定期と過渡期

研究の結果、生活構造は「安定期」と「過渡期」を交互に繰り返しながら、一定の順序で発達していくことが判明した。

1. 安定期（通常 6～7 年）

- 目的: 生活構造を築き上げること。
- 特徴: 主要な発達課題に取り組み、生活の土台を固めます。同一の安定期は二度と訪れず、それぞれの時期に独自の性格があります。

2. 過渡期（通常 4～5 年）

- 目的: 現在の生活構造に区切りをつけ、新しい構造を築く可能性を探ること。
- プロセス:
 - 1. 打ち切り: 現在の構造を終わらせる（分離・喪失を伴う）。
 - 2. 評価: 過去を見直し、何を残し、何を捨てるかを選択する。
 - 3. 模索: 未来への希望や可能性について考え、重大な選択を行う。

3. 分離と個性化は密接に繋がっている

- 過渡期には、その人の人生におけるある時期に区切りをつけなければならない
- その結果として何かを失っても甘んじて受け入れ、過去を見直して評価し、過去のどの面を捨て、どの面を残すかを決め、未来への希望と可能性について考える
- 過渡期が終わると、いくつかの重大な選択を行い、その選択に意味を与え、それを中心に生活構造を築き始める時となる

【第 5 章】 成人発達の課題と可能性

【5-1】 課題 1：生活構造を築き、修正する

発達期が一段と広範なパターンをとると、その発達期を構成する発達段階が発達に秩序と一定の順序をもたせるものとなる

【5-2】 課題 2：生活構造を構成する「5つの要素」の発達課題（夢・職業・結婚）

成人の生活の安定をもたらすのは、生活構造を構成する各要素をたゆまなく発達・実行させていくプロセスです。特に重要な5つの要素には、それぞれの段階で変化が起こります。

1. 〈夢〉の形成と修正
2. 職業の確立と変更
3. 恋愛、結婚、家庭生活
4. 良き相談相手（メンター）との関係
5. 友情の形成（アメリカ男性の深刻な不在）

【5-3】 課題 3：個性化の進展（4つの両極性の解決）

成人前期の生活構造では、4つの両極性（対立）が未解決のままどちらかに偏っているのが普通です。しかし、中年期に入るとこれらを高い次元で解決し、内面的な自由を獲得できます。

- 若さと老い：自分の中の「若さ」と「老い」を直視し、両者の新しい統合の道を探す。
- 男らしさと女らしさ：性役割の強迫観念から解放され、バランスが最終的に改善される。
- 破壊と創造：自らの破滅性を認め、責任を取ることで、これまでにない形で創造的になれる。
- 愛着と分離：分離する力（内省、自己集中力）を強化する。

【第6章】私のリサーチクエスト

レビンソンは、人生には比較的共通した発達の移行期があり、とくに成人期には「人生構造（Life Structure）」を見直しながら発達していくと考えた。また、中年期にはそれまでの生き方を再検討する転換点が訪れるとした。

しかし現代は、

- 情報化社会によって選択肢が増えすぎている
- キャリアや結婚などのライフコースが多様化している
- コロナ禍や引きこもり経験などによって発達課題の経験時期がずれることがある
- 「大人になる」とは何かが曖昧になっている
- そこから生まれたリサーチクエスト
 - 「レビンソンが想定した発達段階や人生構造の再編成は、現代の人々にも同じように生じるのだろうか」
 - 「現代の成人は、人生構造の再編成や発達の転換をどのように経験しているのか」
 - 「人生が予定通り進まなかった人は、どのように自分の人生を組み立て直していくのか」

No.2 岡本裕子による現代の成人発達とアイデンティティ再考

21A26026 武内紫衣奈

【第1章】岡本裕子（1954～）

広島大学大学院教授などを歴任した生涯発達心理学者・臨床心理士・公認心理師。青年期・中年期を中心とした「成人期のアイデンティティ発達」を専門とし、力動的心理療法の立場から子どもから高齢者までの臨床実践に携わってきた。エリクソンのライフサイクル論を日本の現代社会の文脈で再考・発展させ、2012年には国際的に権威のある「Erikson Scholar（エリクソン・スカラー）」の称号を授与されている。

【第2章】理論の基盤：発達臨床心理学的視点

【2-1】乳幼児期の重要性と「かかわりの質」

- 理論的背景：フロイトの心理-性的発達論、A.フロイトの自我発達論、クラインの対象関係論、ウイニコットの発達促進的環境論、サリバンの対人関係論、コフォートの自己心理学など、発達早期の体験を重視する諸理論を基盤とする。
- 病理のしくみ：乳幼児期の各年齢段階で自己および他者関係は質的に変容する。各段階での躓きが固有の精神病理を引き起こすため、心理療法ではその躓きのレベルを見極め、欠落した心理的体験を充足することが基本となる。
- 他者との関係：健康な自我・自己の発達には、母親をはじめとする重要な他者との「かかわりの質」や、各段階で必要な心理的体験が得られているかどうか極めて重要である。

【2-2】成長期から成人期への「発達の視点」の拡張

- 成長期（乳幼児期～青年期）：臨床的問題は子どもの心身の発達、親との関係、家族の状況と密接に関連しており、発達の視点に立った研究・実践の蓄積が多い。
- 成人期の問題と成長期：成人期の心理臨床的問題は成長期の問題と関連させて理解されることが少なかったが、その根っこ（未解決の葛藤や危機）が成長期にあるケースは少なくない。
- ライフサイクルの位置：成人期の問題は、現在その人がライフサイクルのどの時期・どの位置にいるかという視点で捉えることで、本質が見えやすくなる。

【第3章】ライフサイクルと「危機」をとらえる視点

【3-1】ライフサイクルを理解する4つの〈問い〉

「人間を理解する」ことの定義：その人が時間（個人・家族・世界の歴史）と空間（物理的・社会的環

境)の中でどう生きているかをとらえること。

1. ライフサイクルの各時期における、心の各側面の特質と年齢に伴う変化。
2. 身体的・生物学的な影響と、社会・文化的な影響の度合い。
3. 獲得と喪失の両行的（相矛盾する）プロセス、および両者の力の及ぼし合い。
4. 人生の前段階で獲得された心理的特質の、その後の柔軟性（可塑性）。

【3-2】アイデンティティの断層としての「危機」

- 危機の定義：エリクソンの「発達の危機」に基づき、退行的・病理的な動きも含めて捉える。「これまでの自分では、もはややっていけない」という感覚・認識を指す。
- 危機の分類：
 - 標準的な予期される危機（normative life crisis）：入学、卒業、就職、結婚、子どもの誕生・巣立ち、定年退職など、多くの人を経験・予測するもの。
 - 突発的・予測不能の危機（non-normative life crisis）：事故、災害、病気、大切な人の死、リストラなど。心へのインパクトが強く、影響が長く残る。
- 危機を構成する2つの圧力：
 - 内圧：身体・身体機能・知的機能の変容、心理的発達・分化など、内部からの変化。
 - 外圧：家族、所属集団、社会からの要求・要請・期待など、外部環境の変化。

※これらが一時期に集中し、自己の生き方や意識の連続性が断たれるとき、「アイデンティティの危機」となる。

【第4章】成人期発達の2つの軸：「個」と「関係性」

岡本は、成人期の発達を「個」としての発達と「関係性」の成熟という2つの軸、および両者のバランスとして捉える二軸モデルを提唱している。

軸	中心テーマ	方向性・アイデンティティ意識
「個」としての発達	個の自立・確立	個としてのアイデンティティ 「自分とは何者か」「自分は何になっていくのか」 → 積極的な自己実現の達成へ。
「関係性」の成熟	他者の支え・育成	関係性にもとづくアイデンティティ 「自分は誰のために存在するのか」「他者を支えられるか」 → 他者の成長や自己実現への援助（母親、妻・夫など具体的人間関係）へ。

【4-1】生涯発達を並行する「2つの関係性」

アイデンティティの生涯発達には、質の異なる2つの関係性が関わっている。

- 個体内関係性（心の中に内在化された他者像）
 - 誕生直後から母親との相互交渉で形成される。ボウルビィの「内的ワーキング・モデル」に近い概念。
 - 3歳頃の自他分離後も消滅せず、成長後も心の中に生き続ける。
 - 固定的なものではなく、その後の人生で「重要な他者」とのかかわりの中で修正され続ける
- 社会的関係性（自己と他者との具体的な関係性）
 - 3歳頃に個体化が達成された後に獲得される。
 - 人生で出会うさまざまな他者との具体的な関係とその「質」を示し、成人期の役割（親、配偶者、ソーシャルサポート等）を通じて拡大・分化する。これが「関係性の成熟」の第2の軸となる。

【4-2】「個」と「関係性」の入れ子関係

- 思春期・青年期や中年期といった「発達の危機期」には、具体的な他者との関係（社会的関係性）が吟味され、主体的に取捨選択される。
- 同時に、内在化された他者像（個体内関係性）も修正され、関係性のあり方が再体制化される。
- 複数の「関係性にもとづくアイデンティティ」のバランスをとることが成人期の重要課題であり、その土台にはポジティブで安定した「内在化された他者像」をもち続けることがある。

【4-3】ラセン式発達モデル（独自の構造論）

岡本は、人生の過渡期におけるアイデンティティの変容プロセスに一定の共通性を見出し、「ラセン式発達モデル」を提唱した。

- 危機の反復と再体制化：人間は、「青年期」「中年期」「現役引退期」という人生の重大な発達危機期を迎えるたびに、アイデンティティの確立と再体制化を繰り返す。この危機を乗り越えるメカニズム（心の営み）には共通性がある。
- 循環的発達のプロセス：危機に直面して心の揺れに耐え、その変化に折り合いをつけるプロセスの中で、「これまでの自分（過去）」に「新しい自分（現在）」が加わり、より高い次元で新しいまとまりをもった自分が獲得される。心は過去と現在に折り合いをつけながら、螺旋（ラセン）を描くように循環的に発達・深化していく。
- アイデンティティの可塑性と多様性：青年期にすべての人がアイデンティティを達成するわけではない。アイデンティティが未確立のまま成人や中年になるケースもあり、いったん獲得された心理的特質がその後の人生でどの程度柔軟に変容（可塑）し得るかという点も、このモデルの重要な焦点である。

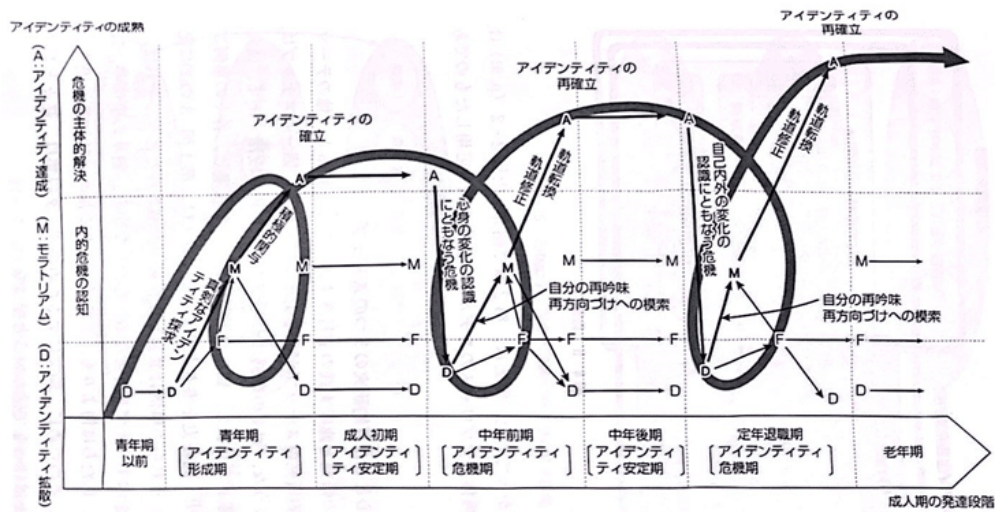


図4-4 アイデンティティのラセン式発達モデル (岡本, 1994a)

(注) 1) A: アイデンティティ達成, M: モラトリアム, F: 予定アイデンティティ, D: アイデンティティ拡散
 2) アイデンティティ形成プロセス: D → M → A (アイデンティティ達成)
 アイデンティティ再体制化プロセス: (A) → D → M → A (アイデンティティ再達成)
 真摯なアイデンティティ探求 積極的関与 軌道修正・再方向づけへの探索
 心身の変化の認識 にともなる危機 軌道転換

図 2 岡本裕子のアイデンティティの螺旋式発達段階モデル

【第5章】現代社会におけるアイデンティティの変容と提言

【5-1】現代社会が抱えるパラドックスと危機

- 高度情報化 (IT 革命) は利便性をもたらした反面、心の発達に負の影響を与えている。エリクソンが示した発達の土台が揺らぐ「現代の危機」が起きている。
- 自己感覚の脆弱化・多元化：まとまりのある自己から、場面で変化する「多元的自己」や「自分が何を感じているかわからない」浅い自己感覚へ。
- 精神テンポのズレ：心の成長（分離-個体化やアイデンティティ確立）に必要なテンポは今も昔も変わらない。しかし、現代社会のスピード化や早期の結果要求により、自分や他者とじっくり向き合う時間が奪われ、自己形成や専門家アイデンティティが未達成になりやすい。
- コミットメントや相互性の希薄化：変化が速すぎて物事に深く「関与（打ち込む）」できず、他者 とつながる力や関心そのものが浅薄化している。
- 他者の苦悩を抱える経験の減少：思い通りにいかない人間の苦悩を深く共有し、抱えるという教育・訓練の場が減少している。

【5-3】危機のプラスへの転換と「呼応したかかわりあい」

- 危機の意義：「これまでの自分では生きていけない」という危機に向き合い、心の揺れに耐えて折

り合いをつけるプロセス（過去と現在の自分への折合と循環的発達）こそが、アイデンティティをシャープにし、心を深化・発達させる。現

- 現代のアイデンティティの危機を乗り越えるためには、日常生活の中で、顔と顔、心と心を合わせた「呼応したかかわりあい（face to face calling and responding）」を意識的・丁寧に実践することが不可欠である。忙しい日々でも、自分の感覚に目を向け、目の前の相手の話をよく聴くという相互の関係性の中にこそ、心の安寧と発達の土台がある。

【第6章】私のリサーチクエスチョンへの接続

- 私は、レビンソンの成人発達理論が1960～70年代のアメリカ人男性を中心とした研究から構築されていることから、現代日本においても同様の発達過程がみられるのかという関心を持った。そのため、日本における成人発達研究として岡本裕子の論考を検討した。
- 岡本はエリクソンのアイデンティティ理論を基盤とし、成人期を「個としての発達」と「関係性の成熟」の二軸から捉えている。一方、レビンソンは仕事や家族、価値観、自己と社会との関係を含む「人生構造（Life Structure）」の形成と再編成に着目している。両者は、成人期において危機や転換が発達の契機となること、また発達を生涯にわたる動的な過程として捉える点で共通している。
- しかし、両者の焦点には違いもみられる。レビンソンは人生構造の形成・維持・再編成という人生全体のパターンや生き方の変化に関心を向けているのに対し、岡本はアイデンティティの揺らぎや再統合、「個」と「関係性」の発達といった心理的変容により焦点を当てている。また、岡本は現代社会の情報化や価値観の多様化によって生じるアイデンティティ形成の困難さについても論じており、現代日本社会の文脈を考える上で示唆的である。
- 私の研究では、成人が人生の迷いや行き詰まりをどのように経験し、その後どのように人生を再構成していくのかを明らかにしたいと考えている。そのため、レビンソンの人生構造の再編成という視点に加え、岡本のアイデンティティの危機や「個」と「関係性」の発達という視点を取り入れることで、人生の転機を経験した人々の語りをより多面的に理解できると考えられる。特に、人生構造の変化とアイデンティティの変容がどのように結びつきながら進行するのかを検討する手がかりとして活用したい。また、岡本が指摘する現代社会特有のアイデンティティ形成の課題は、レビンソン理論を現代日本に適用して考察する際の重要な視点となると考えられる。

No.3 成人期ライフサイクルとアイデンティティに関する関連研究の系譜

21A26026 武内紫衣奈

【第1章】成人期アイデンティティの可塑性と時間的追跡

レビンソンやエリクソンは、青年期にアイデンティティの基礎が築かれ、その後に安定期と過渡期が訪れるとした。しかし、大人のアイデンティティが実際にどの程度の「可塑性（変化の柔軟性）」を持つのかという実証的追跡は、発達心理学における重要な課題であった。

【1-1】岡本祐子（1986）「成人期における自我同一性ステータスの発達経路の分析」

- 岡本は、青年期に獲得されたアイデンティティ（自我同一性）ステータスがその後の人生でどう変容するかを検証するため、40～50代の中高年を対象に回想法を用いたライフコース分析を行った
 - アイデンティティの流動性と可塑性：青年期に確立した自分らしさは決して固定的なものではなく、調査対象者の63.6%が中年期までにステータスを変化させていた。
 - 40代（中年期）という最大の過渡期：青年期のステータスは30代後半までは維持されやすい傾向にあるが、心身や環境の多様な変化が集中する40代（中年期）において、最もドラマチックな変化・再編成が起こりやすい。
 - 体的な解決による成熟：中年期の危機的経験に直面した際、安易に妥協せず、同一性の再体制化に主体的に取り組み、解決し得た人々は、より成熟した同一性ステータスを獲得できることが実証された。
 - ステータスごとの安定性：青年期に「真剣に模索している途中の状態」であったモラトリアム型の変化率は100%であり、最も不安定であった。一方で同一性達成型は最も安定していたが（変化率37.5%）、中年期の新たな危機において安易な解決を選び、他者の価値観に沿う「早期完了型」へと後退する例外的な経路も確認された。

【第2章】中年期アイデンティティ再体制化のプロセスとジェネラ

ティヴィティ

岡本の理論では、「個」の確立の先に他者をケアする「関係性」の成熟（世代継承性：ジェネラティヴィティ）があるとされる。この両者の動的なメカニズムを精緻化したのが以下の研究である。

【2-1】中山賢二（2020）「中年期におけるアイデンティティ再体制化とジェネラティヴィティの関連性」

- 中山は、エリクソンや岡本が提唱した「中年期のアイデンティティ再体制化」を促す手立てとして、ジェネラティヴィティ（世代性）の構成要素とその内省プロセスに着目した。
- 再体制化の4段階漸進モデル：中年期のアイデンティティ再体制化は、ただ混沌と進むのではなく、「危機の時期」「摸索期」「軌道転換期」「再確定期」の4段階を経て漸進し、より成熟・深化していく。このプロセスを前進させるには、危機や葛藤を主体的に受け止め、自己に意味づける社会的な行動が必要である。
- ジェネラティヴィティの構成要素と共同性：ジェネラティヴィティは「創造性」「世話」「世代継承性」の3側面からなり、特に後者2つの相関が高い。ジェネラティヴィティの高い集団は、自己への固執（主体的な行動）よりも、家族や地域社会のケアに関わる「共同的な交流」の得点が明らかに高く、「見返りを求めない脱自己本位的な献身的態度」が含まれる。
- ナラティブ（語り）と精神的健康：ジェネラティヴィティが豊かな人は、過去の苦い経験をポジティブな成果に結びつけて語る「救済の連鎖（redemption sequence）」という自伝的記憶の物語を構築する傾向がある。この語りは「人生への満足」「自尊感情」と正の相関があり、「抑うつ性」や神経性傾向とは負の相関を示すため、中年期の危機を乗り越えその後の持続的な幸福感を高める重要な鍵となる。

【第3章】現代女性のライフスタイル多様化と役割達成感

レビンソンの初期研究が「男性」の生活構造をベースにしていたのに対し、現代社会における女性のライフサイクルは長寿化や少子化、生き方の多様化によって大きく変化し、独自の「危機」と「発達」の様相を見せている。

【3-1】西田裕紀子（2000）「成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究」

- 西田は、25～65歳の幅広い成人女性を対象に、Ryffの6次元概念（人格的成長、人生における目的、自律性、自己受容、環境制御力、積極的な他者関係）に基づく心理的 well-being 尺度を用いて、伝統的な役割移行が困難になった現代女性の発達を検討した。
- 伝統的モデルの限界と多重アイデンティティ：現代女性は妻・母親という伝統的役割と、職業や社会活動という家庭外役割を同時にアイデンティティの中に持つようになった。心理的 well-being の各次元は、人生の様々な危機への挑戦と成長の様相を示し、年齢を追って次元ごとに特徴的な発達の变化（例：若年の「人格的成長」から高年の「自律性」へのシフトなど）をたどる。
- 「役割の有無」から「役割の質（達成感）」へのパラダイムシフト：女性の心の健康を規定するのは、単にその役割を持っているかどうかではなく、各年代に応じた役割における「達成感（役割の質的側面）」を得られているかどうか極めて強く関連している。
- ライフサイクルに伴う役割の重要性の移行（社会活動の発見）：

- 母親役割達成感は、子育て期（25～44 歳）には自己受容や多次元の well-being と強く関連するが、子どもが自立し始める 45 歳以降は関連がほとんど見られなくなる。
- 親役割の重要性が低下する 45 歳以降の中年期女性においては、ボランティアなどの「活動者役割達成感（社会活動）」が心理的 well-being の全次元と強力に関連し始める。自発性に基づく社会活動への参加や意欲は、就労とは異なる形で「役割喪失（役割移行なき状態）」における新たな自己再構成の基盤となる。

【3-2】宇都宮真輝（2012）「成人女性の生涯発達理論に関する省察－30 代シングル女性の課題を中心に－」

- 宇都宮は、Levinson や Josselson、Sheehy らの理論を再検討し、特に 32～43 歳の「30 代シングル女性」が直面する生活構造の変動と発達課題を考察した。
- 30 代半ば～40 代前半の構造変化：この時期は生活構造の根本的な見直しを迫られる不安定で困難な時期であると同時に、大きな個人的成長（個体化）が期待できる時期である。
- シングル女性特有の葛藤：シングル女性は、仕事（個の確立）の領域だけでなく、結婚・出産に関する生物学的期限および心理・社会的な圧迫により、関係性の領域で極めて大きな葛藤を抱えやすい。
- バランスに富んだ内的な自己統合：シングル女性が幸福感を得るためには、単にどのようなライフスタイルを選んだか（結婚の成否など）という外的な事実よりも、これまで脇に置いていた価値観や役割を再検討し、内的な変化を受け入れ、自分自身をバランスよく統合していく作業（内的な生活構造の再編成）こそが重要である。

【第 4 章】「子どもがいない女性」の生涯発達と喪失の転換

女性の発達において伝統的に「母親役割」は大きな位置を占めてきたが、子どもをもたない選択（または結果）をした女性が、ライフサイクルの過渡期においてどのように自己を再構成し、岡本の言う「関係性の成熟（ケア・世代性）」にたどり着くのかを掘り下げた研究群である。

【4-1】佐藤佳淑（2015）「子どもをもたない選択とは一子どもがいない女性を対象にした心理学的研究の概観―」

- 佐藤は、国内外の先行研究のレビューを通じて、子どもがいない状態（being childless）が女性の人生に与える長期的影響と心理的適応の規定因を生涯発達の観点から概観した。
- 理由による精神的健康の差異：中年期以降、子どもがいないこと自体は精神的健康に直接影響しないが、その「理由」によって様相は異なる。自ら選んだ群（voluntary）に比べ、不本意な理由（involuntary：特に不妊などの生物学的障壁）で子どもをもたなかった群は後悔や気がかりを抱えやすく、治療断念から 15 年前後が経過しても精神的健康が低いケースがある。しかし、子ども

がない選択・人生を「肯定的に受容できている女性」は抑うつや孤独感が有意に低い。

- 喪失から「獲得・成長」への転換とジェネラティヴィティ：子どもをもたない経験は従来「喪失」と捉えられてきたが、生涯発達の観点からは、配偶者との関係深化など「獲得」の側面（成長・発達の契機）になり得る。特に中年期以降の心理的適応には、子ども以外に対する「ジェネラティヴィティ（生成継承性）」が高まる経験が決定的な役割を果たす。

【4-2】竹家一美「子どものいない女性の生涯発達——不妊治療経験者と未経験者の比較から——」

竹家はナラティヴ（語り）を用い、子どものいない女性の生涯発達プロセスを「不妊治療経験の有無」に基づき、岡本理論の「主体性（個）」と「共同性（関係性）」の2軸からアプローチした。

- 4つの発達類型（タイプロジー）：
 - 1. 不妊治療経験群—共同性志向型（母親断念転身タイプ A）：不妊治療の断念を最大の転機とする。中年期以降、他者や社会への「ケア」に生きがいを見出すことで、共同性をさらに深化させる。
 - 2. 不妊治療未経験群—主体性志向型（キャリア達成タイプ B1）：主体性を発揮してキャリアに邁進し、自ら意図して人生の転機を作り出していく。
 - 3. 不妊治療未経験群—主体性志向型（挫折転身タイプ B2）：中年期危機を最大の転機とする。危機を経て主体性と共同性を統合し、自身の経験を活かして他者を援助する仕事（関係性）に巡り会うことで、過去を肯定する。
 - 4. 不妊治療未経験群—折衷型（成り行き転身タイプ C）：レビンソンの言う「人生半ばの過渡期」頃に転機を迎え、主体性志向へと変化し、現在を最も充実させている。
- 「不在」の意味づけの変容：未経験群は子どもの不在を当初から「だから仕事に邁進できる」とプラスに捉える傾向があるのに対し、経験群は当初マイナス（喪失）と捉えていた。しかし、過渡期を経て現在は、治療経験から得た「ケア」という生きがいの営み（関係性の mature）へと、子どものいない人生を前向きに意味づけ直している。

【第5章】特殊な転機・非伝統的キャリアにおける自己再構成

ライフサイクルの過渡期において、人々が客観的な出来事をどのように「主観的転機」として意味づけ、ラセン式に自己を再編成していくのかを示す、多様な就労形態・キャリア支援に関する研究である。

【5-1】土元哲平「転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー」

土元は、自身の実践経験（オートエスノグラフィー）やインタビューを通じ、教員志望学生などの「転機」におけるキャリア支援モデルを構築した。

- 主観的意味づけの重層性：出来事が単なる変化に留まらず「人生の転機」として機能するためには、個人の社会文化的文脈における主観的な意味づけを重層的に明らかにすることが有用である。
- 能動的・社会関心駆動型の目標：転機において、個人が「能動的」かつ「社会関心駆動型（他者や社会へ関心を向けること）」の目標を生み出すことが、個人のレジリエンス（回復力）を高め、成長の媒介となる。これは岡本理論における「個の確立から社会的関係性への投企」のプロセスを、キャリア支援の側面から実証・補完するものである。

【5-2】下村英雄・白井利明（2007）「フリーターのキャリア自立—時間的展望の視点によるキャリア発達理論の再構築に向けて—」

下村らは、従来の段階的・直線的なキャリア発達理論（レビンソン等）の限界を指摘し、非正規雇用（フリーター）のキャリア自立プロセスを説明するため、動的な「時間的展望」を用いたキャリア構成理論を提示した。

- 動的プロセスとしての自立：フリーターのキャリア自立（経済的独立および個人的・社会的価値の実現）において、「自己理解」「社会を知る」「決定」の3要素は静的なステップではなく、相互に影響を及ぼし合う動的なプロセスとして捉える必要がある。
- 時間的展望の重要性：過去・現在・未来のつながりをどう見なすかという「時間的展望（指向性）」のタイプが、実際の職業選択行動を規定する。現在と未来がポジティブに繋がっているか否かといった個人の時間的指向性に適合的なアプローチを行うことが、成人期移行期の迷走（モラトリアム）から自立へと向かわせる支援の鍵となる。

●

【5-3】平岡真理「中高年期における将来の人生の出来事の予測と準備について——第2の人生や退職・定年後の生活について——」

平岡は、中年期から高年期への移行（退職・定年・第2の人生）に際して、個人が将来のライフイベントをどのように予測し、準備を整えているのかを探索的に研究した。

- 予測・準備における性差と文脈（生活構造の差）：将来の出来事に対し、男性は家族の文脈から離れて「自分自身の文脈」のみで予測を完結させ、結果的に準備を怠る（準備なしの件数が顕著に多い）傾向がある。一方で女性は、予測から生じる「家族への影響（関係性の文脈）」まで深く検討し、具体的な準備行動を起こすという質的差異が見出された。
- 中年期女性の自己実現の表れ：高年期（高齢期）の予測が健康や配偶者の死など「時間の有限性・喪失」に集中するのに対し、中年期における予測の内容は進学・資格取得・海外滞在など多様性に富む。特に中年期女性において「子どもの巣立ち」が第2の人生の予測のきっかけとなっており、これは子育て終了に伴う自由時間の増加を機に、新たな方向で才能を発揮しようとする強固な自実

現（個の再確立）の欲求を示唆している。

- 主観的コントロール感と精神的健康：同じ定年や役割喪失という出来事であっても、そこから生じる葛藤に対して「自分で調整・コントロールできる」と主観的に評価できている場合は、それを「ポジティブなライフイベント」として捉え、有効な準備へと繋げることができるため、精神的健康の維持に大きく寄与する。

【第6章】私のリサーチクエスチョンへの接続

- これらの先行研究を通して、成人期の発達にはレビンソンが示したような年齢段階に沿った変化だけではなく、人生の転機や危機をどのように意味づけるかによって大きく異なることが示唆された。岡本（1986）は、中年期においてアイデンティティが大きく再編成される可能性を示しており、成人期のアイデンティティが固定的ではなく高い可塑性を持つことを明らかにしている。この知見は、人生の迷いや行き詰まりを経験した人々がどのように自己を再構成していくのかという私の関心を支えるものであった。
- また、中山（2020）が示した危機から再確定へ至るプロセスや、「救済の連鎖」と呼ばれる語りの特徴は、危機そのものではなく、その経験をどのように意味づけるかが発達や心理的成熟に影響する可能性を示している。これは私がインタビュー研究において、出来事そのものよりもその経験の語られ方に注目したいと考える契機となった。
- さらに、西田（2000）、宇都宮（2012）、佐藤（2015）、竹家らの研究は、現代社会では結婚・出産・就労といったライフコースが多様化しており、レビンソンが想定した標準的な人生経路だけでは成人発達を十分に説明できないことを示している。特に、同じ出来事であってもその意味づけや役割の達成感によって心理的適応が異なること、また喪失経験が新たな自己形成やジェネラティブィティへとつながることは、人生構造の再編成を理解する上で重要な視点であると考えられた。
- 加えて、土元や下村らの研究は、転機とは客観的な出来事ではなく、個人によって主観的に意味づけられる経験であることを示している。また、過去・現在・未来をどのようにつなげて理解するかという時間的展望が、その後のキャリア形成や自己再構成に深く関わることも指摘されている。これらの知見から、人生の転機を経験した成人が、自身の過去をどのように振り返り、現在をどのように位置づけ、未来をどのように構想しているのかを語りの中から検討する必要性を感じた。
- 以上の先行研究を踏まえ、私の関心は「成人期の発達段階そのもの」を明らかにすることから、「現代日本において、人々は人生の危機や転機をどのように意味づけ、その経験を通してアイデンティティや人生構造をどのように再編成していくのか」を明らかにすることへと具体化された。特に、危機や喪失の経験がどのように人生の再構成や他者との関係性の深化につながるのかというプロセスを、当事者の語りを通して検討したいと考えている。